

茶道は気持ち

愛知県立豊田北高等学校二年（愛知県）

結城 舞優

私は中学生の頃ソフトテニス部に所属していたが、高校では運動部ではなく入部経験のない文化部に入ろうと思っていた。文化部といっても様々なものがあるが、私は茶道部へ入部した。その理由は二つある。一つ目は小学六年生の頃に地域のお祭りでも茶道体験をさせていただいたことである。私はその時人生で初めて茶道に触れた。触れたといっても私が実際にお点前をやる訳でも無くお運びをしただけであったが、お菓子やお茶を運ぶだけでたくさんの所作があることに驚き、それと同時にそれぞれの所作にどのような意味があるのか知りたくなった。二つ目は礼儀作法を学びたかったからである。私は今まで自分の礼儀作法に自信がなかった。そのため少しでも自分に自信を持てるように礼儀作法を茶道を通して身につけたいと思ったのである。

入部してすぐはただひたすら姿勢とお運びのお稽古だっ

た。お茶碗を回す向き、足を出す順番など一つ一つの動作に決まりがあつてとても大変だった。しかし先生が動作を教えてくださる際にそれぞれの動作をする理由も教えてくださったのでとてもやりがいを感じ楽しくお稽古をする事ができた。このお稽古と並行してお客と点て出しのお稽古も行った。お客は覚えることが多いし、点て出しはコツがなかなか掴めず大変だった。だけど同級生の部員とお客の所作を確認したり、先輩方にお茶を点てるコツを聞いたりと大変だからこそたくさんのコミュニケーションを取ることができた。このことから仲間の大切さを感じ、加えて茶道は人と人が互いに思い合つてこそ成り立つのだと思つた。

二年生になってから本格的に平点前のお稽古が始まつた。最初は覚えることに必死だった。また、新学期ということもあり心に余裕がなく、お客様への気持ちを持つことができなかった。私は進級と同時に先輩方から部長を任せられた。先輩方を尊敬していた私は憧れの先輩方から私が選ばれたことに喜びを感じ、今までの努力が認められたと思ひ嬉しかった。しかしそれと同時に私は憧れの先輩方のような部長になる自信が無かった。この事も心の余裕が無い事に繋がったのかもしれない。お点前にも部長であることにも自信が無いまま文化祭前になってしまった。写真撮影のために先輩方が部活に顔を出してくれた日があった。私はその時前部長からお手紙をいただいた。そのお手紙はそ

の日先輩が私を廊下で見かけた時元気が無いように見えたためその日の休み時間を使って書いてくれたものだった。

お手紙はルーズリーフに書かれていて急遽書いてくださったのが分かるのに、内容も字も丁寧でイラストまで描いてくれていて先輩からの気持ちも伝わった。現代ではわざわざお手紙にしなくてもSNSなどを使って思いを伝えることもできるのにお手紙を書いてくださったことが嬉しかった。お手紙の内容も自信が無かった私を励ましてくれる内容で読み終えた後に泣いてしまった。そして手紙を読み終えると同時に茶道において一番大切な事は相手を思う気持ちだと身に染みて分かった。先生が「茶道は気持ち」と言っている意味がよく分かった。これまでは動作を覚えようと必死だったが、動作よりも気持ちを先に考えるようにしたら自然と作法を覚えられるようになり、より丁寧に一つの所作をできるようになった。先輩のお手紙と少しずつ上達していく自分の作法のおかげで以前よりも自信がつき、文化祭を成功させることができた。

私はまだ一年しか茶道を習っていないが「茶道は気持ちである」ということは胸を張って言える。始めに礼儀作法を学ぶために入部したと述べたが、礼儀作法も根本は思いやる気持ちであると思う。またお互いがお互いを思いやる気持ちを持つことでお互い良い気持ちで過ごすことができる。そのおかげでいつしか私にとって茶道は作法を覚える

場所から心が落ち着く場所へと変わっていった。私は今までこんなにも心が落ち着く場所に出会ったことがなかった。これからは誰よりも相手を思いやる気持ちにしたい、茶道が部員全員にとって心が落ち着く場所になりたい。そして来年度活を辞めてからも茶道で学んだことを生かせるように、これからもっと多くのことを学べるようにしたい。